

七夕記念日

藤原ライラ

「ねえねえ、天の川は織姫と彦星、どっちが渡るの？」

その質問をした時、私はピカピカの大学一年生だったし、彼もまだ大学生だった。

「はい？」

「だから、天の川の岸の織姫のいる地点をA地点とするじゃない。で、彦星のいる地点をB地点とするでしょう？ だったらA地点とB地点、二人はどっちで会うの？」

「なるほど。A地点で会うなら川を渡るのは彦星だし、B地点で会うなら織姫ってことか」

「そうそう」

「そんなことは簡単だよ」

私がどんなにわけのわからないことを質問しても、遼二くんはこうしていつも答えを出してくれた。

「二人の距離が等しくなる中間の地点、C地点で会うんだよ、きっと」

天の川にかかるアーチ状の橋の上で二人は会うのだと、遼二くんは教えてくれた。

「じゃあ私達もそうしょっか」

「そうだな。それがいいな」

「真ん中だと、ファミマの辺りかな？」

夜中にいきなり「会いたくなかった」と電話しても、私と彼の間の距離をまだ、全速力で走って越えられた頃のお話。

「で、今年はどうするの？」

「どうするもこうするも、平日ですしね」

携帯電話の向こうから聞こえてくる遼二くんの声はのりりくらしするばかりでじれったい。最近いつもこうだ。「会いたい」と言うのは私の方で、遼二くんはこうやって言い訳をするばかり。

「そこをなんとかありませんかね？」

「努力はする。でも会えるとは確約できん」

何というお役所対応。お前は身も心も国に売ったのか。

出会って、付き合っ三年目。遼二くんが社会人になって二年目。そして遠距離恋愛二年目。

この不景気に、見事市役所の試験に受かって遼二くんは公務員になった。そして華々しくUターン就職。それは素直にすごいと思う。私だっていっぱいお祝いした。

去年はまだ良かった。非日常の距離感は刺激的で、わけもなく長電話しては、やれ無料通話だなんだとはしゃいでいた。

遠距離が重たくなってきたのはいつからだろう。思い出せない。

私の沈黙が痛かったのか、ため息まじりに遼二くんが言う。

「しょうがないだろ？ おれだって帰りたいけど、ハゲ課長の許しがでないと帰れん。それとも佐里がハゲ課長と交渉するか？」

「うちの遼二を三日ほど借りていきます。探さないでください。ちゃんと返します。これでどうだ」

「それで済んだら困らないんだけどなあ」

そのまま「おれの心配ばかりしないで佐里も早くレポートをやりなさい」という大人ぶった言葉を残して遼二くんはそそくさと電話を切った。明日は日曜日なのでもう少し長く話していたかったのに。

今年の七夕は木曜日。ああ呪わしき平日。

せっかく会いたい人に会える日だというのに、どうして日本政府は休日にしてくれないんだろう。いいじゃないか、七夕記念日。

まるで煮え切らない遼二くんを反映したかのように、月曜日の週間予報で木曜日はくもりだった。七夕は雨の日が多い。梅雨が明けてないことが多いからしょうがないのかもしれないけど。

雨が降ると天の川の水かさが増して、川に架かる橋が渡れなくなってしまう。織姫と彦星、どちらが渡るにしても、どちらも渡るとしても。二人は一年に一回も会えなくなってしまうのだ。

天気と人の予定は似ているのかもしれないと思った。自分ではどうしようもできないし、せいぜい「頑張っ」と祈ることが出来るぐらいだ。したがって私は某県某市の公務員とくもり空に向かって南無南無と手を合わせることにする。あれ、なんか違う？

「さりー、合コン行かない？」

同じ一般教養を取っている斜め前に座った奈々ちゃんが言った。明るめの茶髪とくっきりと引かれたアイライン。いかにも女子大生と言った感じの子だけど、割と仲は良い。

「だめだめ。佐里にはイケメン公務員の彼氏がいるから。誘ったって無駄だよ」

私の隣の席に座る由紀がすかさず返す。イケメンかどうかは私は知らんがな。

「うっそー。さりーってばやり手ですな！」

三つ年上の社会人と付き合っていると言うと大抵驚かれる。大学三回生も歳の上では大人だけど、まだまだ思いっきり子供で学生という身分に甘えている。社会人ってばなんて本物の大人の響き。

「そんなことないよ。それに別に普通の人だよ？」

確かに遼二くんは普段は確かに大人に見えるがそれは体裁を取り繕うのが上手いだけで、中身は思いっきり子供である。大体彼女との電話より日曜日の朝のヒーロータイムを優先して早寝するような人が立派な大人なはずはない。それに社会人と付き合ったわけじゃない。付き合っていた人が社会人になっただけだ。

「じゃあやっぱりパスだよねー？」

「いつ、やるの？」

私が尋ねると、奈々ちゃんは少し意地の悪そうな笑顔を浮かべて「木曜日だよ」と答えてくれた。

咄嗟に色んなものが浮かぶ。

煮え切らない態度。ヒーロータイム。合わない予定。その一つ一つをぶんぶんと頭を振って消して、私は答えた。

「ううん、ごめんね、やっぱりやめとく」

「そっかー。そりゃそうだよねー」

がっかりしたように奈々ちゃんと言うと、授業開始のチャイムが鳴った。奈々ちゃんは前に向き直って、教授が教室に入ってくる。そして私も何となくがっかりしたまま授業を受けた。

織姫はすごい。きっと彦星以外にも織姫を好きになってくれる人はいるのだ、それこそ星の数ほど。彦星ってばたかだか雨が降ったぐらいで諦めてしまう軟弱者なのに。三六五日のうちたった一日しか会えないのに。他の日は、自分のことなんか忘れてるかもしれないのに。それでも何千年も、彦星だけを好きなのだ。

私には逆立ちしたって真似できそうにない。だからちょっとがっかりしたのだ、自分自身に。

「ごめん」

開口一番、遼二くんはそう言った。

「その、とっても偉い人がわんさかやってくる大変大事な会議が入ってだね」

続く言葉は大体予想が付いたから、一つ深呼吸してから言った。

「……国の狗である自分には抜けられそうにもない。ゆえに木曜日には帰れないと言いたいのですかね？」

「うむ、佐里は物分りが良くて助かる」

寂しいのは、いつも私だけなのだろうか。

最近いつも思うことはそれだ。

「いいよ。丁度私も木曜日合コンに誘われたところだったし」

遼二くんはいつも平然していて、私だけが寂しくて。遼二くんのために合コンも断ったのに、そんなことを遼二くんは知る由もなく、知る術もなく。

もっと傍に、一緒に居てくれる人を好きになれば良かったのだろうか。隣に並んで同じものを見て、同じように笑って。そうすればこんな思いをしなくて済んだのだろうか。好きなのは私だけなんじゃないだろうか。

「えっ」

「その、とってもかっこいい人がわんさかやってくる大変大事な合コンだから、私も張りきって行ってくることにするよ」

こんなことを言いたいわけじゃなかったのにとと思う自分と、ざまあみろと思う自分の攻防に何だか泣きそうになった。それでも私は平静を装って話し続ける。

「じゃあ、そういうことなんで。遼二くんも頑張ってる」

「待て、早まるな佐里。おれが悪かったから、そのえっと何というか、落ち着いて——」

珍しく慌てた遼二くんが電話の向こうで喚いているのを聞こえないふりをして、『通話終了』のボタンを押した。

電話を切ってしまうと自然と涙が溢れて来た。そうだ、あんなことを言わずに泣いてやればよかったんだ。けれどももうどうしようもない。仕方がないから枕に突っ伏して、嗚咽を堪えて泣いた。体のどこにこんな水分があったのか分らないほど泣いたのに、涙は中々止まろうとはしてくれなかった。

泣き寝入りしたのが良くなかったのか、次の日私は酷い顔で大学に行く羽目になった。遼二くんからは丁重な謝罪のメールが届いたけれど、見なかったふりをした。

大好きな少女漫画のワンシーンがある。とある遠距離恋愛中のカップルの話。女の子は男の人からかかってきた電話に明るく「元気ですよ」と答えるけれど、本当は寂しさに耐えられなくなって電話を切った後に泣いてしまう。きっと彼女が泣いていると察した彼は、一晩中高速道路を車を飛ばして彼女に会いに行く、そんな話。

私が泣いたことを、貴方は知らない。知らなくていい。

そう意地を張って一日を過ごした。毎日のようにかけていた定期連絡の電話にも出なかった。

現実には漫画のように上手くは行かない。遼二くんは王子様でも何でも無い。しがないただの公務員なのだ。

そして水曜日を飛ばして木曜日。

合コンに行くという奈々ちゃんと由紀を見送って、私は一人とぼとぼと下宿のアパートへと帰る。

天気予報では「くもりのち雨」となっていた。頭の上には今にも泣き出しそうな雲が広がっている。自分が会えない分、せめて織姫と彦星には会えて欲しかったけれど私にはどうしようもできない。

七夕の雨は催涙雨というらしい。会えなかった二人が流す涙だそうだ。

「二人」という言葉に何だか悲しくなった。遼二くんは私に会えなくても泣いたりしない。きっと今頃鬼のように仕事をこなしていることだろう。

泣くのはきっと私だけなのだ。そう思うともうだめだった。

俯いたら、一つ二つと涙がこぼれて地面に小さな染みを作った。

私の涙に誘われたように、ぽつぽつと雨が降り出した。地面をリズムカルに雨が叩く。すぐに私の涙なんてどれがどれだか分からなくなった。

晴れればいいなと願掛けのように傘を置いてきたから濡れるしかない。雨に隠れるように私は泣いた。

「ばかみたい」

呪わしくそう呟くと、何故だか雨が止んで、代わりに殊勝な謝罪の言葉が降ってきた。

「ばかなことは認める。おれが悪かった」

顔をあげると、紺色の傘をさした捨てられた子犬みたいな顔をした遼二くんが立っていた。

どうして？ どうして？ なんでこんなところに遼二くんがいるんだろう。

頭の中に怒涛の勢いではてなマークが浮かぶ。

「……幽霊？」

「それが鬼のように仕事を切り上げてきた彼氏に言う言葉ですか」

「何しに来たの？」

つっけんどんに私がそう返すと、遼二くんは少し恥ずかしそうに顔を背けた。

「何って、きみに会いに来た」

「なんで？」

私の疑問には答えずに、遼二くんは「少し歩かないか？」と言った。言われるがまま、大きめの傘に入れてもらって歩く。

「……昔さ、佐里が『天の川はどっちが渡るのか』って聞いたの覚えてる？ あの時おれ確か、『中間地点のC地点で会う』とか答えたよな？」

「うん」

「あれは間違いだな」

雨空を仰いで遼二くんは続ける。

「きっとさ、好きが多い方が川を渡るんだよ」

待ちきれないから、早く会いたいから。たった一日会える日だから。だから好きが多い方が川を渡る。

「だから、おれが会いに来たんだ」

今度こそ私の方を見て遼二くんは言った。

「これで、もう『私だけが好きなんじゃないか』とかで悩んで泣かずに済むだろ？」

空いている方の手で私の頭をぽんぽんと撫でる。あっけにとられている私に、にやりと笑って。

「ここが、A地点だろ？」

分かってたんだ、ちゃんと。私が泣いたことなんて、知らないと思ってたのに。

「離れてるけどな、それくらいはおれでも分かるんだよ」

止まったはずの涙がまた溢れてくる。

ああ、そうだ、こういう人だった。こういう人だから、私はこの人を好きになったんだ。

「って泣くなよ。ほらほら、よしよし。当分はどこにも行かないからな」

うろたえた遼二くんの指が私の涙を攫っていく。ここまできてどうして泣かれるのか分からないらしい。違う、これは悲しい涙じゃないのに。

「……仕事は、どうしたの？ 会議は？」

「公務員なめんな。有休万歳、会議は昼までで終わったから半休取ってきた。ついでに金曜日も休暇届け出してきた。これで三連休。おれは合コンなんぞには負けん」

あんまりにも不機嫌そうに言うので思わず嘔き出してしまった。そんなに気にしてたんだ、合コン。たまにはああいうことを言うのもいいのかもしれない。

「会えなかった織姫と彦星には悪いけどさ、久しぶりにゆっくりできるよ。だからその……もう泣くなよ」

「ううん、織姫と彦星もきっと大丈夫だよ」

空を見上げて、私は言う。

根拠はないけど、何となくそんな気がした。確かに二人は泣いていて、この雨はその涙なのかもしれない。だけど、

「涙は嬉しいときにだって、流れるんだよ」

この雨雲の向こうで二人が嬉し泣きしている様子が想像できるような気がした。こうして私が

、今泣いているみたいに。

休日じゃないけど、平日だけど、七夕はきっと、会いたい人に会える日だ。

やっと、安心したように遼二くんも笑った。

「そうだな。おれだって頑張ったら何とかあったんだ。彦星も本気出したのかもしれない」

きっとそんな彦星を、織姫はずっと好きなのだ。何千年も前からずっと。多分これから先もずっと。

「だいすき」

囁くようにそう言って、私はこつんと、頭を遼二くんの肩に寄せた。

ねえ、織姫様そうでしょう？

あなたもきっと、会いたい人に会えたでしょう？